

アメリカ・ミシガン大学訪問報告

鈴木 彰

訪問先：University of Michigan (ミシガン大学)
Center for Japanese Studies (CJS : 日本研究センター)
Center for Japanese Studies Publications Program (CJS 出版会)
The Asia Library (アジア図書館)

訪問日時：2006年8月29日

訪問者：鈴木 彰・村井まや子

ミシガン大学日本研究センター (CJS) 及びアジア図書館のご厚意により、ミシガン大学の日本研究・教育の現状とこれからの展望等を伺う機会を得た。新年度開始直前の慌ただしい時期であったにもかかわらず、調整段階から快くていねいに対応してくださった関係各位に、まずは心よりお礼を申し上げたい。

ミシガン州のアン・アーバーに所在するミシガン大学は、アメリカにおける日本研究の拠点のひとつとして、今日に至るまで長くその役割を担ってきた。同大学の中に、1947年(昭和22)に設立されたCJSは、アメリカで最も古い日本専門の研究センターである。ミシガン大学及びCJSと日本との関係、CJS設立に至る経緯と現在までの歴史等については、CJSのホームページに詳述されている(<http://www.umich.edu/~iinet/cjs/index.html> 日本語ページもあり)。当日、あいにくの雨模様ではあったが、アジア図書館司書のKenji Niki氏に、豊かで美しい緑に包まれ、落ち着いた雰囲気のあるキャンパス内を案内していただいた。あちこちで新入生対象のキャンパスツアーに出会った。期待感に包まれたその雰囲気が、氏の魅力的な歴史語りとの共鳴するなか、往時のまま今に続く校舎の窓の向こうに、明治期にここを訪れた日本からの留学生たちが机に向かう熱心な姿を想った。1880年代の末、渡米中にアン・アーバーに移り住んだ若き南方熊楠が、彼自身は学生ではなかったが、キャンパスの内外で大学の学生たちと議論する印象的な姿は今でも語りぐさになっているとのこと。すれ違う在学生たちの落ち着いた表情は、学内の充実した研究・教育環境ゆえであるとともに、大学の町としての歴史がおのずから創り出す空気感によるところも大きいのだろう。

今回の訪問に関する全体調整は、CJS事務局のYuri Fukazawa氏のご尽力によるものである。事前にこちらからお送りした調査項目をもとにタイムテーブルを設定し、豊富な資料等を用意していただいた。調査項目は次のとおりである。

I 日本語・日本学関連機関の調査

- ①設立の目的、②沿革、③歴代のスタッフ(専門分野・出身大学・主要論文)、④企画・行事等、⑤他機関との連携、⑥海外学術交流の実態、⑦パンフレット、⑧所蔵図書(日本語・日本学関係)、⑨出版物(紀要・論集・資料集・目録・教科書・研究所・啓蒙書等)、⑩当該機関関連文献(大学史の該当部分や研究所史等)、⑪情報発信の手段、⑫その他の特色

II 日本語・日本学関連教育の調査

①カリキュラム（現在と過去）と目的，②学生の傾向（在籍人数・動機や関心。過去から現在への推移），③日本への留学の実態，④卒業後の進路

III 図書館の調査

①所蔵図書の概要，②収集方針・実状等，③日本関係特別コレクション，④資料公開の方針・利用状況，⑤パンフレット，⑥その他

以下、当日のタイムテーブルに沿って訪問の概要を記すこととしたい。

9:30～10:45 CJS 出版会 Editor Manager の Bruce Willoughby 氏へのインタビュー。本出版会オフィスは CJS メイン・オフィスからは 10 分ほど離れたところに位置し、現在の実務スタッフは、ここに 20 年以上お勤めの Willoughby 氏おひとり。1950 年に設立されて以来、教科書・研究書・啓蒙書等を含めて幅広い出版活動を続けており、アメリカでの日本学関連図書の出版界では確固たる地位を占めている。学部教員の協力を得つつ、出版局として独立した活動も展開しており、アジア学の研究集会に出かけるなどして全国によい執筆者を求め、また読者層の拡大を図っている。1988 年以降は、① Michigan Monographs in Japanese Studies (モノグラフ・シリーズ)、② Michigan Classics in Japanese Studies (古典シリーズ)、③翻訳という三本柱をたて、最近ではこれに加えて Electronic Publications にも力を入れつつあるようだ。多くの出版物を財産として活かすべく、絶版本のオンデマンド出版も用意しつつある。最近では日本のテレビ・アニメ・女性文化史・禅の庭園・文化批評等の分野に力を注いでいるとのことであった。その活動は質・量共に驚くべきものであった。ここは気持ちよく働けるところだ、と語る Willoughby 氏のことばに、日本のさまざまな表情を全世界に発信する仕事への情熱とすぐれた実務能力が伺われた。

11:00～12:00 アジア図書館に移動。Kenji Niki 司書との会談。東アジア図書館は、Hatcher Graduate Library の 4 階にあり、中国・韓国・日本の書籍・マイクロフィルム等を収集している。書籍のみに限ってみれば、2006 年 6 月末段階で蔵書数は 70 万冊を越え、そのうち Chinese Collection が約 40 万冊、Japanese Collection は約 29 万冊、Korean Collection は 2 万冊。この他に、3 地域合計で約 4.5 万リールのマイクロフィルムと約 3.2 万のマイクロフィッシュを蔵する。その圧倒的な蔵書量に驚かずにはいられまい。学生・院生はもとより、アメリカ国内外から研究者が訪れているようだ。時流に流されぬ長期的な展望のもとで資料収集を続ける姿勢こそが、研究・教育の一大拠点をおのずから生み出していくことをあらためて実感した。その他、Niki 氏からは、世界的な図書館員のネットワークづくりとその活動等について、興味深い話を伺うことができた。本共同研究の一環として村井助教授がこの直前に訪れたイギリスでの調査とも関わる事柄が話題にのぼり、学生や研究者間だけではなく図書館員レベルでの国際交流の必要性と可能性を強く感じた。

12:00～14:00 昼食。Niki 司書には、図書館内の一室で話を伺った後、キャンパス内を案内していただいた上、人気のレストランで楽しい昼食のひとつを提供していただいた。その席に、13:00 からお会いする予定だった Hitomi Tonomura 先生がおみえになり、その場で昼食をご一緒しながらお話を伺うこととなった。歴史学部にも所属され、専門分野は日本史・女性史。先の CJS 所長在任時には、CJS50 周年記念誌“Japan in the World the World in Japan 1947-1999”の編集代表を務められ、現在では CJS 出版会と CJS 修士課程のディレクターを兼任されてもいる方である。近年の学生の興味の傾向や授業の様子などについて伺った。最近では日本史を主専攻にしようとする学生の数は必ずしも多くはないが、学生たちの日本への関心は続いている。その出発点は、近年の「サムライ」「武士道」ブームを含めて、アニメや漫画・映画などであることも多いので、歴史学という見地からの日本理解や資料

読解の力を養うことに関して、少し前までとは違う努力も必要になってきたとのことであった。講座内容としては、毎年、史料解説講座（集中講義）のための専門家を講師として日本から招聘しているというお話もあった。

14:00～15:00 Tonomura 先生の案内で CJS メイン・オフィスに移動。引き続き、CJS 修士課程の実務担当職員である Azumi Ann Takata 氏とお会いした。同課程には州外からの進学が多く、今年度からウェブ上での願書提出を開始したという。この修士課程は 1950 年代には存在しており、現在のカリキュラムは 96 年に改定したものだという。ここ十年間、このプログラムへの志願者は 20 名前後で推移しており、この秋にも 7 名の新生（Graduates）が進学予定だそうだ。学生の志向としては、日本語能力習得をめざし、経済・ビジネス面での関心を持つ者が多く、卒業後の進路としては、博士課程に進む者（例年 1～2 名）、日本関係の仕事につく者（デトロイト周辺の自動車企業等）、日本に出る者と大別できるという。印象的だったのは、学問・研究の領域では各教員付きのアドバイザーが対応し、その他の事務や生活の領域では相談所が設けられているということであった。学生たちの精神的な支えとしての役割は大きいだろうと思われた。

15:00～16:00 続いて、日本語教育プログラムの責任者である Mayumi Oka 先生のお話を伺った。学部学生を対象にした日本語教育の授業は、9 人の講師と 2 人の TA で運営しているとのこと。1 クラスは 16 名以下で構成され、1 年生 13 クラス、2 年生 6 クラス、3 年生 4 クラス、4 年生 1 クラスと、ビジネスクラスが 1 クラス、インテンシブクラス（2 年分を 1 年で履修するコース）が 1 クラス提供されている。2 年 4 セメスターを基本とし、希望者がそれ以降の履修をすることになる。留学は必修ではないが強く勧めるようにしており、主な行き先は 4 つあるが、とくに九州大学の留学生プログラムがすぐれているとのことである。東京・京都などとは異なり、地理的な条件から自然と視線がアジアに向かうことに加えて、大学内に学生寮があることは、送り出す側からするとやはり大きな魅力だそうだ。この他、英語話者に対する日本語教育の教材作成にも力を注いでおり、2009 年には新教材を出版予定とのことであった。そこでは同分野における新機軸が打ち出されることだろう。

16:00～17:00 次に、CJS の outreach 責任者である Jane Renee Ozanich 氏と会談。お仕事は、レクチャーシリーズ（秋・冬。学生・一般向けの公開講座）とフィルムシリーズ（夏・秋。31 年前から続く日本映画上映会）という二本柱の活動の他、今年で 6 年目を迎えたジャパンボウルというイベントの企画・運営、アン・アーバーで年一回開かれるブックフェスティバル（1 万人規模）への参加、パートタイムと呼んでいる小学校～高校の教員向けのワークショップや日本語教育に関する「ジャパンキット」の貸し出し、特別イベントの企画・運営といった、実に幅広い活動に従事しており、ニューズレター「伝書」の編集・刊行（年 2 回。そのうち 1 号は日本語版も作成）やホームページの管理・運営もお仕事のうちだという。CJS のこうした対外活動のうちでも特記すべきは、地元の小～高等学校と大学生、CJS 教員、地元の人々が合同で行うジャパンボウルであろう。クイズ大会や日本語スピーチコンテスト等が行われ、あわせて約 500 人の参加者があるという。また、2006 年は 250 人の参加があったという餅つき大会のほか、紙芝居、書き初めといった特別イベントは、アン・アーバー滞在中の日本人家族を含めた、地元で生活している人々の交流の場となっていることが意義深い。また、学生に対しては、月に一度、ランチテーブルと名付けて、軽食を CJS が用意して、学年・クラスを越えて日本語のみで会話する場を提供しており、これも好評を博しているそうだ。全体として、研究のみに埋没するのではなく、長期的な視野に立って、学内外のつながりを非常に重視しているという印象が強い。「場」を提供するこうした活動は、現在の CJS を大きく特徴づけているといえる。

17:00～17:30 最後に CJS 所長で、ミシガン大学ロースクール（日本生命寄附講座）教授でいらっしゃる Mark D. West 先生とお会いできた。調整がつかず、今回はお会いできないものと伺っていたが、私どものために無理に時間を作って下さったのであった。30 分ほどの短い時間ではあったが、CJZ の

今とこれからの活動についてや、この地で日本紹介の活動をする事の意義についてなどなど、率直なお考えを伺うことができた。豊富な日本滞在経験をお持ちであるがゆえのことでもあろうが、「ふつうの日本」を紹介することの難しさを口にされたのが強く印象に残った。たとえば餅つき。日本らしさを象徴するイベントとしてCJSでも企画されている。しかし、今の日本でどれだけの人が、お正月に餅つきをしているだろうか。紙芝居然り、書き初めもまた然り。こうした問いかけの奥には、確実にわれわれの共同研究のテーマである「表象としてのく日本」という問題が横たわっている。

わずか1日ではあったが、多くの成果を得た訪問であった。大学内の一機関でありながら、学問・研究面で国内外と交流し、教育面でも着実に日本語応用力のある卒業生を輩出し、いっぽうでは地域社会との密着をも実現しているCJSの活動は、これからの大学付属研究所のひとつのモデルとして大いに参考になるものだと思われた。今後とも、こうした機関との関係を継続していけることを願ってやまない。